

出 藍 文 庫

東 方 歌 物 語
「はなひらく」

雪ふれば

見わたすものなにもなく

待ち人のぞむ紅椿かな

季節を問わず、ひまわりが咲き誇っているのだらうと思つたメディスン・メランコリーの目の前にひろがったのは、花らしい花が一つもひらいていない、ちいさな家の側に植えられている木も枝を震わせるだけでつぼみすら見えない夜明けだった。

せっかく手紙を書いて訪れたというのに歓迎されず、肩をいからせ、風見幽香の家に入るとカーテンは閉ざされ夜のようにくらく、丸テーブルに置いてある照明は満月のように艶めき、ペーパーナイフや封の切られた真白な封筒、梅をあしらつた便箋、ペンへうすい影を落としている。

手紙を読まれて嬉しかったが、主人がベッドで寝息を立てている状況にいつそう腹立たしくなり、大声を浴びたものの、かすかに色のある声を上げるだけで動く気配を見せず、いよいよ叩き起こすように勢いよく布団の上へ飛び乗れば、幽香はにぶい声を上げ、ようやく薄つすらと目を開ける。

自慢の緑髪のいたるところが跳ね、長い前髪の隙間から漏れ出るはげしい眼光に、メディスンは瞬時に飛び降り、見上げるこゝろしかできない。

「なに？」

低い声に問われ、メディスンは背筋を伸ばし、機械ように首を左右に振り、この時になつて、おとなしく幽香の起きるのは待ってればよかったと思いはじめたけれど、事を思い返すと、幽香の返事が遅いのが悪いのか、アリスと相談した上でここにやってきましたためメディスンが悪いのか、それともアリスが悪いのか全然わからなくなり、胸が嫌に高鳴り、鼻の奥が痛い。

「……そう怯えなくていいじゃない」

微笑されたところで、メディスンの恐怖は治まらず、機嫌が治るまで待ち続けることしかできない、辛うじて、口の端から零れたのは、自身の非を認めるような一言であった。

「ご、ごめんなさい。でも、私は悪くないよ」

「どういうこと？」

「だって、私、手紙書いたもん……」

「だからって、こんな時間に来ることないじゃない」

「でも、アリスが」

「アリスが？」

「早く行けって」

「時間のことじゃないと思うのだけど？」

「え？」

「ばかね」

「アリスが、早く行った方が幽香も嬉しいって言っていたから……」

「本当？」

「ほんとだよ」

部屋はしんとしたのが、さきほどのようにおもしろいものではなく、幽香がカーテンを開けたり、着替えたり、二人分の紅茶を淹れようとちいさいながら立て続けに音が蘇り、メディスンはこの時になったようやく侵入者から客人に格上げされたように思え、高い椅子に腰掛け、幽香を待っている、テーブルの上に広げられた便箋が目に入り、足をぶらぶらと振りながら、幽香は一体どんな返事を書くようにしていたのだろう、アリスと違い、拜啓も時節の挨拶も近況もかしこもなく、ただ、手紙を読んだこととメディスンの来訪を待っていることだけ、そんなシンプルな手紙になることだろう。

幽香らしいと思う一方、メディスンとの間に沢山の言葉は不要と思われる、色々と声をかけてくれたアリスと違うこと

が何だか悔しくなり、紅茶や軽食を用意する幽香の背中に、構ってもらえるように声をかけた。

「幽香の話をしたよ」

幽香はフライパンを火にかけ、パンを焼くとメディスンに目を遣る。

「誰と？」

「アリスと。この前の春のこと覚えてる？」

「……春？ 何かあったかしら」

「もう、幽香はおばあちゃんになっちゃったの？」

幽香はパンの焼き色を気にかけて、少し笑う。

「忘れることもあるのよ」

「去年のことだよ？」

「色々あると忘れてしまうのよ」

「色々って？」

「色々よ、それで去年はどこに行ったの？」

「一緒に、山登りしたじゃない」

「登ったわねえ、……今年も行くつもりなの？」

「もういいよ」

「どうして？」

「寒いし、疲れるし、天狗とか河童とかかわいし……」

「メデイスンもまだまだね」

「だって、スーさんの毒が効かないなんてはじめてだったんだもん」

昨年の春、メデイスンは幽香の家にやって来た、朝焼けを見に行きたいので、どこか連れていってと頼んだところ、幽香は山に登りましょうと答え、空を飛べるのはどうしてわざわざ山に登らなければならないのかと思ったが、幽香と共に出掛けられるのならどこでもよかったため、山を登ることにしたが、道中、天狗に敵と間違われるわ、河童には通行料を脅されるわ、山頂はまだ冬のように凍えるわ、と幾つもの苦難に襲われたため、幽香から今年も登りましょうかと問われれば、メデイスンは強く拒否する気だ。

幻想郷の四季と花についてくわしい幽香は、メデイスンが後ろをついて歩くと何気ない調子で道端に咲く花や木のことを話してくれた、メデイスンは他のことも知りたく今年は山ではないところに連れていってもらいたく、アリスと話し真つ先にやってきたのである。

「それ、しまっておいてちょうだい」

「枕元でいいのー？」

「ええ」

メデイスンがテーブルの上の物をしまい、戻ってきた時、幽香もキッチンから二人分の温かい紅茶、サラダ、クロックムッシュを持ってきたところで、幽香の手料理に頬をゆるめ、熱々のたまごやチーズのつまったクロックムッシュにかぶりつく。

「やっぱり、幽香の料理は美味しいね」

「褒めても何も出ないわよ」

幽香は微かに頬に笑みを浮かべ、紅茶用の角砂糖をメデイスンの方へ寄せた。

「アリスの所で色々な紅茶を飲んだからお砂糖がなくてもへーきよ」

甘い香りの紅茶やミルクティーを好むアリスとストレートを好む幽香とは、茶葉や種類も違い、メデイスンはわざわざ両眉を寄せ、角砂糖を溶かそうとしたものの、幽香にそう言ってしまったため、すぐに入れてしまうのは恥ずかしく、躊躇っていると、幽香が一つだけ角砂糖を入れた物珍しく見上げる。

「たまにはちょっと甘いのも飲みたくなる時があるのよ」

「たまには……そ、そうだよね」

すぐに二つも角砂糖を入れると、甘く飲みやすい、いつもの紅茶になり、メデイスンは本題を口にする。

「今年はどこへ連れて行ってくれるの？」

「春は花のことがあるからだめ」

「さっきまでの流れは、今年山じゃなくて他のところと連れていってくれる流れじゃない？」

「どうしてそうなるの？」

「え？」

「誰も今年の春の話と断定してなかったでしょ？ 早とちりね」

「いじわる」

「好きに言いなさい」

「いじわる、おに、あくま」

「そんなことを言う子には、おかわりあげないわよ？」

「怒ってるじゃん！」

「冗談よ、じょーだん」

「ほんと？」

「ええ」

そんなことを話していると幽香は手早く朝食を食べ終え、二杯目の紅茶をメデイスンのティーカップに注ぐと立ち上がり、窓を開け、花畑を見ていた。少し遅れてメデイスンも朝食を食べ終え、窓枠に手をかけ背伸びをして、幽香の隣に顔を出す。

澄んだ日が当たっても窓の側の先には葉一つなく、花畑には花一つ見えず、影が落ちる土や小高い丘しかあらざ、目を凝らすと花畑の所々にかすかながら雪が残っている、これでは幽香がいくら環境を整えたところで、つぼみがひらくことはない、メデイスンは不安そうに幽香の顔を盗み見ると、それまで何事にも動じず、悠々としていた幽香の顔が引き縮まっており、これは何かあるのだろうとメデイスンも強張らせたが、指先にぶつかるつめたい風に堪らず幽香のそばを離れ、まだぬくもりが残っているティーカップを包むこむように持つ。

「……冷えるわね」

幽香は窓を閉めた、そこから一步を動かさず悔しそうに花畑を眺めている、幽香の花畑は一つの花が山のように咲くこ

ともあれば、色彩豊かな花畑が広がることもあり、白い雪のような花々に迎えられたのはメデイスの記憶に新しい、今年もそんなふうにメデイスを迎える気だったのだろうと振り向いた幽香の顔から見て取れる。

「ちよっと手伝ってくれない？ 花の調子が良くないみたいなのよ」

「調子……?」

「手伝ってくれたら、夏にお礼でもするから」

「おれい?」

「ええ、駄目かしら?」

「でも、幽香、そう言っつて、約束破ったじゃん」

「今度は覚えておくから大丈夫よ」

「ほんと?」

納得がいかず渋るように幽香を見てみると、幽香はメデイスに歩み寄り、丁寧にしゃがみ、視線を合わせ、メデイスの小指と己小指との絡めた。

「約束するわ」

「そこまでするなら……」

「ありがとう、優しいのね」

「べ、べつに、おれいのためじゃないから、幽香がそんな顔するから、手伝うだけだから!」

急いで準備をし外へ出た幽香を追いかけるようにメデイスも家を飛び出ると、幽香は膝を折り、雪を静かに払い、また歩き、適当な所の雪を払う……。

「幽香だったら、能力でできるんじゃないの?」

「だめよ」

「どうして?」

「自然の内に咲くからいいのよ。咲く花があれば、咲かない花もある。土を変えたり、水をあげる時間を変えたり、そういう一手間があるから、いいのよ」

「でも不便じゃん」

「不便でもいいのよ。私もメデイも長く生きるんだから、ゆっくりすればいいじゃない」

「そういうものなの?」

「そういうものよ。メデイ、あつちを見てきてちようだい」

同じような風景が続いていると思ったが、そこには小さな赤い花が、藁を編んだ屋根の下で、風に揺れ震えていた、きつと幽香が用意したものなのだろう。

メデイスンは大きな声で幽香を呼んだ後、冷たい手を引き、走りだした、幽香の戸惑う声に耳を傾けず、メデイスンは笑顔で走り、花の前へ幽香を案内する。幽香は震える手で優しく雪を払い、花弁に触れ、メデイスンを一瞥した後、こういう歌を詠んだ。

——雪ふれば見わたすものなにもなく待ち人のぞむ紅椿かな——

メデイスンは歌について深い知識をもっていないなかったため、幽香の言葉がどういう意味をもっているのか、どうしてそんなことを口にしたのかということとは全く分からなかったが、そういう歌を詠われて全然悪い気はせず、むしろ、心のどこかで胸を張っている自分自身の見出していた。

メデイスンは赤い花に微笑を送り、花畑を歩きまわり、清らかながら僅かに刺のある朝の空気を胸一杯に吸い込み、幽香に声をかけた。

「幽香、探しに行こーよー」

幽香はひとりぼっちの花との別れを惜しむようにしばらく動かず、明らかに花を見ている、メデイスンはまるで自分自身が偉業を成し遂げたような嬉しい錯覚を覚え、幽香の

元まで走っていった。

「幽香、幽香、どういう意味？」

「何が？」

「さっきの」

「いざれ分かるわ」

「今、知りたい」

「嫌よ」

「幽香だけ分かっているなんてずるいー」

「いざれ分かる時が来るわよ」

「そういう話じゃないの」

「すぐに分かるうとしても、頭で分かっているだけなの。も

つたいないわ」

「難しいのだめ」

「今は難しいかもしれないけれど、夏がきて、秋が訪れて、冬に包まれて、また春が来た時、メデイも分かるわ」

「一年も先のこと言われても……」

メデイスンは人形から妖怪になった存在であるゆえ、その在り方は幽香やアリスといった存在とは異なる、年に一度のアリスの検査が必要になったのも、そういう在り方が関わ

っており、その在り方とメデイソンの記憶について関係があるかはメデイソン自身はもちろんのこと、幽香もアリスも、そして八雲紫にも分からないことであろう。

メデイソンの表情が沈んだ時、幽香は彼女を励ますように手を取り、朝日で輝く雪解けの花畑を歩きながら言う。

「心配しなくて大丈夫よ。時が移ろい、生じ、消えるものは確かにあるわ。でも、そういう流れでも消えないものがあるのよ」

「……むずかしい」

「私もアリスもいるから、メデイがちょっと忘れていても平気よ。今もそうだったでしょ？」

メデイソンは心の奥でまるで火が灯ったように熱くなった、幽香の手をつよく握り、二人はしばらくの間、花畑を歩きまわり、春の芽吹きを探すことにしたのだった。

梅雨が明け、花畑に降り注ぐ光はいつそう強く、窓の近くで鳴く蝉は夏の到来を喜ぶように甲高く鳴き、メデイソンは朝から一歩も外を出る気が訪れず、幽香の家に引きこもり、少しでも冷たいところを求めるように、床を寝転がる。

幽香は春のように積極的に出かけるのではなく、すだれの掛かった窓から花畑へ視線を投げ、何も異変がないことを知ると、河童に冷やしきゅうりと引き換えに作ってもらった扇風機の前に戻り、氷の溶けたアイスティーをすすり、適当に本を読んだり、メデイソンと同じようにごろごろしているため、メデイソンは気軽に出かけようとは言えず、涼を求めるように扇風機の前へ割り込もうとしたが、

「寄らないで」

という幽香の拒絶と同時に大きな団扇を渡され、メデイソンはついに幽香の背中に荒らげた声をおつけた。

「ひまだよ！ ひまだよ、幽香。ひーまー、どこか行こうよー。……ねえ、幽香、聞いてる？」

「聞こないわ」

「ひまだよ、ひーまー」

「そ、私は暇じゃないわ」

「客人をもてなさい主人ってどうなの？」

「冷たい紅茶も、軽食も出したじゃない」

「お客さんがひまって言っているんだよ？」

「私はメイドでもバトラーでもないのよ」

「じゃ、幽香は何なの？」

「花を見守る妖怪よ」

「夏の花でも見に行こうよ」

「そこから見えるじゃない」

「ひまわりだけじゃない……」

「文句ある？」

「あるよ、とつてもあるよ！ ひまわりだけじゃないでしよ？」

「そうね」

「見に行こうよ、ねー、ゆーかー」

「そうね、だったら、メデイはどんな花が見たいのよ？」

花に詳しくないメデイスは言葉に詰まり、幽香に涼しく笑われ、春のように出掛けられると思ってい期待を大きく裏切れ、怒りを静めるかのように氷の溶けたアイスティーを飲み干し、夏に負けた幽香の腰に飛びついた。

「ちよ、ちよっと！ 何よ！」

扇風機の風で自慢の柔らかい髪が乱れようとも、肌にとわりつく暑さですぐに離れたくなったが、幽香が出かけようと言うまで離れまいと幽香の腰に手を回す、幽香はメ

デイスンが思っていたよりもずっとずっと冷たく、心地良かったが、あまりの体温の違いに一瞬、幽香を見上げると、底冷えするような声が降ってくる。

「離れなさいよ」

「出掛けようよ」

「嫌よ」

「じゃ、離れない」

「何でよ」

「何でも」

「何でもないでしよ」

「じゃ、内緒」

扇風機の静かな羽音だけが広がる家、幽香はこれ以上メデイスンに触れられ、暑苦しいのが続くのが嫌なのか、

「仕方ないわね……」

と、ようやく音を上げ、そのまま流れるように、夜になったら、と小さな声で付け加える、メデイスは目を輝かせる。

「ほんとだよ！ 絶対だからね！ やっぱりやーめたとかなしだよ！」

「はいはい」

「はいはいじゃない！」

「元気ねえ」

「ねえねえ幽香、何がいるの？ 準備しよう、準備」

「準備？」

「そう、準備」

「まだしなくても平気よ」

「準備は大事なんだよ。アリスも言った。準備や設計の段階でイメージできてないと、いくらよくても後に活かせないって。何でも、記憶はあやふやだからだつて」

「アリスも熱心ねえ……」

「でしょ、でしょ！ あ、幽香、話反らしちゃだめだよ。準備、準備」

「準備つて言ったつて、夜に出掛けるのよ？」

「そうやってぐーたらしたら、ぎりぎり慌てるんだよ？」

「帽子ぐらいいいんじゃない？」

メデイスンは幽香の言葉を聞きすぐにクローゼットの側に置いてある帽子掛けから、つばの広い大きな白い帽子を被り、姿見鏡の前に立つが、すとんと目深となり、影が落ちる救いを求めるように幽香の方へ振り向いたが、幽香のだら

しなく伸びた足しか見れない。

「幽香、帽子」

「合わないでしょ？」

「うん……」

幽香はメデイスンの持つ帽子を軽やかに持ち去ると、クローゼットの奥を漁り、見慣れた麦わら帽子を一つ取り出し、メデイスンに手渡す、メデイスンは姿見鏡の前で、幽香やアリス達がするように品良く回ると、夏用の薄い白地のスカートが花のように舞いひろがり、帽子は勝手に目深になり、ずりおちることなく、メデイスンの頭に行儀良く座り、幽香はそんなメデイスンを脇目に、自分用の帽子を選んでいる。

「びつたりだ！」

「当たり前じゃない。私が作ったんだから」

「そんなことあった？」

「あつたわよ。アリスが夏バテでダウンしたでしょ？」

「あ、あの時！」

「思い出した？」

「うん、思い出した、思い出したよ。あの時は魔理沙も霊

「夢も咲夜も来て、大忙しだったね」

「そうね、あなたが駄々をこねなかったら、私も作ることはなかったんだけどね」

「そうだったね、ありがとう、ごめんね」

「一回聞いたから十分よ」

「でも、嬉しそうだよ？」

幽香はメデイスンにそれ以上探られるのを断るように帽子を選ぶのをやめ、靴棚にしまった何本もの日傘を閉じたり、開いたりを繰り返しては、小首を傾げるが、その頬に柔らかな笑みが広がっているのを見て、メデイスンは駆け寄る。

「私もおしゃれしたいー」

「帽子あるからいいでしょ」

「幽香みたいな欲しい」

「私みたいな物？」

「うん、こう、オトナ！　ってやつ」

「……は？」

「え？　あるじゃん、こうほら、こう……」

「似合わないからやめておきなさい」

「にあうもん！」

「服に着られるだけよ」

「そんなことないもん、アリスに頼めば、作ってくれるもん。アリス、やさしいんだよ？　このスカートだって、アリスが作ってくれたんだもん」

「もう聞き飽きたわ……」

「だから、アリスに言えば、ぜったい、にあうもん」

「それじゃ、アリスに頼んでみなさいよ」

「……でも、なんて頼めばいいの？　幽香みたいな服、で伝わる？」

「落ち着いた夏服が欲しいって言って見たら？」

「落ち着いた、夏服……？　幽香、だいじょうぶ？　服は落ち着かないよ？」

「分かっているわよ、アリスもそれで理解してくれるわ」

「ほんと？　幽香、アリスのこと馬鹿にしてない？　アリスはすごいんだよ。私のことも、魔理沙のことも分かるんだよ」

「でしようね」

「やつぱり、ともだちのことは分かるの？」

「やつぱりって？」

「アリスも幽香のこと、よく話してくれたよ」

「意外ね」

「幽香みたいな顔するんだよ」

「どういうことよ？」

「言った通りの意味だけど？」

「……そう」

幽香のしろい耳たぶがほのかにあかくなつた頃、メデイスンはどこに出掛けるか教えてもらっていないことを思い出し、出掛けるところが分からなければせっかくだら選んだ服もだいなしになってしまふ、急いで声を上げた。

「どこに出掛けるの？」

「川辺を通つて、人里よ」

「人里？」

メデイスンは人里というものがどんなものなのか全然知らず、辛うじて知っていることといえば、人間が住んでおり、妖怪も時々人里に足を運ぶ、そんなところにメデイスンも足を運ぶことが許されるのだろうか、メデイスンはまだ自分の力を完璧に操れる自信はなく、せっかくだら幽香が誘つてくれたというのに暴走してしまふ恐れがある。

「大丈夫よ、何かあったら、私が何とかするから」

あいかわず傘や帽子や服を選ぶのに忙しい幽香は何気ない調子で、メデイスンの不安をぬぐう、わざわざ出かけようと云つてくれたということは、きっと何か良いことがあるにちがひなく、メデイスンはまだ真昼間だというのに楽しみがとめられなくなり、目的を訊いてみるも、幽香はまるで出し惜しむように何とも答えてくれない。

「どうして、人里なの？」

「今、言う必要ないでしょ」

「知りたいよ、ゆーカー！」

「いやよ」

そうして、時はメデイスンが思っているよりもゆるやかに流れ、ようやく日が暮れ、丸い月が薄墨の空にのぼりはじめ、幽香とメデイスンは迷子にならないように手を取り合ひ、家を出る、ひまわりの花畑は日の光を洗い流すかのように真つ直ぐ天へ伸び、月光を目一杯に浴び、鈴虫の高い鳴き声がひまわりの隙間から流れてくる。

「暑いね」

「お昼よりはマシでしょ？」

「それでも暑いよ」

メデイスンは暑さを凌ぐように胸元を開け、手でかすかに風を送ってみるも全然涼しく思えず、無駄な労力を用いてしまい一層暑く、風はどこからか重たい湿気を運んできて、顔をしかめる、幽香から何も言わずに扇子を手渡され、あおいでみたところ新茶の香りが鼻先から全身に広がり、メデイスンは汗をぬぐいながら笑顔を浮かべた。

メデイスンはだんだんと楽しみを隠しきれず、幽香の手を離れ、一人でさきを歩く、十字路を前によくやく立ち止まり、日傘を片手にゆつくりと歩いてくる幽香を待たず、走って彼女の元に戻る。

「幽香、どつち？」

「分からないのにどうして先を歩くの？」

「わかるよ、右でしょ？」

「あら、知っているの？」

「……言ったじゃん？」

右に折れて歩き続けると、メデイスンたちが迷子にならないように、蛍の優しい灯火が点々と広がっている、メデイスンは再び幽香の手から離れ、灯火の方へ駆けけると、蛍たち

は逃げるように草木や川の方へ散り散りになり、まるいちいさな光はほとんど遠くへ飛んで行く。

「メディー」

幽香の焦ったような心配したような暗い声を受け、本来の目的を思い出し、幽香のところまで戻ってくる、幽香は眉をひそめたが、メデイスンを見るとすぐに微笑を浮かべ、やわらかい声をかける。

「また見えるわよ」

「でも、蛍はあまり長いこと生きられないってリグルが言っていたよ」

「じゃ、明日、また見つけなければいいじゃない」

「いるかな？」

「いるわよ。リグルと一緒に虫カゴと網でも持って、探せばいいじゃない」

「だめだよ。そんなことしちゃ、かわいそう」

「そうかしら？」

「そうだよ。私たちの都合で捕まえちゃだめだよ」

ふたりはしばらく何も話さず、虫の音に耳を傾けていたが、

—— 虫の音に耳をすませば胸が鳴り ——

不意にメディスン自身の口からそんな言の葉がすべりおち、何かを求めるように幽香を見上げるも、残りの十四字を待つように口をかたく結んでいる、メディスンの胸にはもはや、残りを詠い、紡ぐほどのものはなく、ただ、純粹な困惑が胸の内にはずとずと広がる。

メディスンは歌というものの知らないため、自分のような無学者が詠うようなものではなく、ただ詠われた歌に対して、なにかを知っているように笑うことしか許されない、貴い存在同士で心通わせる遊戯。現に、幻想郷で歌を詠むのも、幽々子、紫、輝夜、霊夢、阿求……とそのどこにもメディスンをはじめとしたか弱いものの名前はない、しかし、メディスンの心に広がった十七文字はだれが聞いて歌であろう。彼女たちのように巧みでなければ、こまやかな心情が歌に流れていることもないであろうが、それでもメディスンはメディスンなりに歌をしたためようとした、残り十四文字が音となれば、和歌と呼ばれるものになるが、一度ちごこまってしまった思いをふたたび歌にするような技術を持つていなかった。

—— 光追いかけてひた走るかな ——

幽香はそんなメディスンのところを写し取ったかのように詠った、メディスンは羨望の眼差しを幽香に送ったが、すぐに歌の意味を理解してあかい顔をした。

「私、そんなことしないもん！」

「さつき、あぶなかつたじゃない？」

「さつきの話じゃない。大体、幽香が人里しか言わないのが悪いんだからね」

「美味しいものを食べに行くだけよ」

ようやく目的を教えてもらったメディスンは、急いで幽香の手を引き、走りだした。

「そういうことなら急がないとだめじゃない。幽香のばか！」

「急がなくても大丈夫よ」

「美味しいものは私達を待ってくれないのよ」

「作る人間がいるんだから待つわよ」

「だめ！ そういう問題じゃないの」

「そういう問題よ」

「幽香はすぐそういうことを言うのだめだよ！」

そんなことを言い合いながら、流れる汗を拭うことなく人里まで走った、人里は一部を除けば、夜に身を寄せつけるように火の落ちた民家が連なり、メデイスンはまるで別世界に来たようなふわふわとした感覚を味わい、現実を思い出すように駆け抜けてきた川辺や丘の方を見返してみたものの、螢の薄い光は闇に喰われ、暗闇が広がっている、時折むっとした熱を帯びた風が、森を揺らし、不気味な笑い声がこだまする。

メデイスンは背中を伝う汗に不快感を覚えながら、幽香の手をはなさないように強く握りしめたが、すぐに幽香が幽香ではないような違和感を覚え、確かめるように見上げると、幽香は汗を拭い、

「こっちよ」

と、メデイスンの腕を引っ張り、人里へ踏み込み、大きな歩で目的地へ向かう。

メデイスンは幽香に引つ張られるまま、どんどんと知らないところへ向かう、くらかった人里は踏み入れると、所々の窓から橙色の明かりが密かにこぼれ、その光と共に流れてくる人間達の声は、メデイスンの感情をいざなうように次の家

からも、その次の家からも流れ、きつとこの光のどこかへ案内してくれるのだらうと期待に胸がふくらむ。

幽香はとある民家の引き戸を開けると別世界が広がっていた、浴衣姿の人間達が赤ら顔で大きな声を上げ、外とは全然ちがう熱さに満たされ、目の前の光景に目を奪われる、人間達のテーブルには何本もの酒が置いてあり、カウンターには洋酒の類を黙々と飲む老年や熱のある調子で店員に話しかける女の姿もあった、幽香は彼等に目もくれず、店員に目を配らせ、奥へと向かう。

「お酒？」

「私はね」

幽香は氷の入ったグラスに洋酒を注ぎ、飲みながらやさしい調子で教えてくれる。

「私は？」

「この夏にびったりのものを持ってきてくれるわ」

「何それ？」

「もう少し待ちなさいよ」

「言ってくれてもいいじゃん」

「面白くないじゃない」

「たいくつだよ」

「メデイも飲む？」

「苦いのきらい」

「知ってる」

「知ってたら訊かないでよ……」

こどものように頬をゆるめ、ちびちびと舐めるように琥珀色の液体を飲む幽香を眺めることしかできないメデイスは、つまらなく、やれ物価がどうかか新聞記事がどうかか流れてくる話に耳を傾けていたが、

「お待たせしました」

と、店員に声をかけられ、メデイスの前に透明な皿が置かれたと思えば、幽香の顔が見えなくなるくらい氷の塊を持ってきた、透明な氷の塊はブルーに色付き、室内の強い灯りをきめこまやかに受け、メデイスの瞳のような細かな輝きを放っている。

スプーンでつつくと、脆い音をかなで、幽香の髪の毛が見えそうになり、メデイスは慌てて、しかし崩れないように細心の注意を払いながらかぶりつく、ブルーの甘みの直後、身体中に心地良い冷たさが響き渡る。

「おいしい！」

メデイスは暑さを忘れるように無我夢中で食べ続ける。微笑する幽香が見え、幽香は夢中に食べるメデイスの口の端に飛んだブルーをぬぐう。

「頭、痛くなるわよ」

幽香の忠告通り、途中、慣れない頭痛に襲われた、しかし、懸命に耐え、一気に食べ終えた頃、メデイスは満腹感と満足感を交互に味わう。

幽香はまだ、一杯の洋酒を飲んでいる、グラスが傾けられると、からんと静かに音が生じ、メデイスは食べ終えたばかりの自分の姿と、まだまだゆっくり飲んでいる幽香の姿を比べ、

——虫の音に耳をすませば胸が鳴り光追いかけていた走るかな——

という歌が蘇り、急激に恥ずかしくなった。メデイスは火照りを沈めるように幽香に声をかける。

「もっと食べたい」

「適当に、何か食べましょうか？」

「うん！」

幻想郷に実りの時分が訪れると、幽香はいそがしくなり、便箋などが置いてあった丸いテーブルは花とハサミで埋まる、穏やかだった幽香の顔はだんだんと険しいものとなり、メデイスンは幽香を怒らせないように花を包んだり、アリスに密かに教えてもらった疲労に効くお茶や軽食を振る舞い、一日でも早く前のような日常が戻ってくるように手伝うのであった。

花の注文がおおくなるのが、この時期なのである、夏の間準備ができればいいのだが、

メデイスンは早い段階から準備をした方が良くと思ったのだが、幽香の仕事であるため強く言うことができず、幽香と一緒にだらしない一夏を、のうのうと過ごしていたのである。

メデイスンと幽香の間には事務的な会話のやりとりしかなく、一息ついて、ティータイムで花を咲かせるようなことはない。

一日、また一日と過ぎ、丘や山の木々が色付き、幻想郷全

体が黄昏に染め抜かれた頃、メデイスンは幽香を選んだ花をきれいに包み、幽香の指定したリボンとメッセージカードを結びつけ、幽香は凝り固まった身体をほぐし、ながい息を吐いた。

「ありがとう、お疲れ様、これで、おしまい」

「幽香こそお疲れ様。大変だったね」

「そうね、何か淹れてくれる？」

「むーりー」

幽香はメデイスンの軽い言葉に微笑を送ると、ベッドに倒れ込むと、少ししてやわらかい寝息が聞こえてくる。

作業の間、メデイスンは幽香にこれほどの仕事をずっと一人でやっていたのか、と尋ねた、幽香は最低限の言葉で肯定し、再び、誰かから誰かに送られるであろう花を選びはじめた。

メデイスンが手伝うまでの間、幽香は一人で黙々と花を選び、切り、包むということを繰り返していた、一日に何件も作業を続けたところで、一人でできることは限られており、全ての仕事を終えた頃、木の葉が散り、枝が震える頃になっていたかもしれない。

幽香にとつて、この時分は春や夏のようにゆっくりと時の流れに身を任せるような時分ではない、葉が散った頃には幽香は急いで花々が雪に負けないように作るのでろう、花がひらけば、出かけ、夏はそれまでの疲れをとるように家にいる、涼しくなれば人里でお酒を飲む、メデイソンが来るまでの幽香の生活はそんなことの繰り返しだったのかも知れない。

ベッドに伏した幽香は、思い出したように顔を上げた。

「アリスに手紙は書いたの？」

「……あ」

山の紅葉が枯れた頃、メデイソンは幽香の家を出て、再び花ひらくまでの間、アリスの宅で過ごす、完全自立型の人形であるメデイソンだが、定期的にメンテナンスを施さなければならず、一人では時間がかかるため、アリスの研究を手伝うとう名目で、アリスの宅へ向かう。

アリスもアリスで暇ではない、日々、研究に勤しんでいる、そこに、メデイソンがなんの連絡も入れずに行つてしまえば、非常に失礼であり、研究が山場となつていけば、追いつ返される可能性も高く、メデイソンは必ず、訪れる前に一

筆執ることとした、幽香とアリスの手紙のやりとりを見て、メデイソンも彼女たちを見習つたのである。

幽香は起き上がり、数枚の貨幣をメデイソンに渡した。

「お礼よ」

「お買い物してくる！」

メデイソンはすぐに人里へ行き、アリスに似合う便箋を探すが、彼女にそこまで花が似合うとは思えない、幽香に送る手紙であれば、メデイソンはすぐに秋色に実つた便箋を買えたのだが、今回の相手はアリスである。

アリスに無地の便箋ではシンプル過ぎ、だからといって全体に柄の入つた便箋では魔理沙のようであり、精々、ワンポイント描かれたものが良いのだが、メデイソンの思うようなものが見当たらず、メデイソンは何件ものれんをくぐる。いつしか烏や雁が群れをなし、茜色の中を飛び、ちいさな影を通りに落とし、吹き抜ける風は肌寒くなり、日が落ちてしまふ前に帰ろうと急いだ、全然良いものが見当たらず、結局、時間に負け、シンプルな白い便箋とペンを買い、帰りに貸本屋に寄り、手紙の書き方に関する本を借りて。

「……何があったのよ」

暗い面持ちのメデイスンは、幽香が淹れてくれた甘い温かなアップルティーを飲みながら、便箋とペンを取り出す。

「売ってなかった、アリスに似合うのが」

「どんなのが欲しかったの？」

「とうもろこしみたいな色、アリスの髪もそんな感じだし……でも、全部が全部とうもろこしじゃなくて、こう、かわいいのが……」

「去年に買ったのは残っていないの？」

「ないよ」

「結構、買ってたじゃない」

「ないよ」

去年、憧れだけで筆を執り、貸本屋で借りた本とにらめっこをしながら、山のように失敗作を作り上げ、ようやく満足のいく手紙が書けるようになったのは、北風が木々を揺する頃であり、メデイスンは急いで荷造りをして、幽香に別れの言葉を告げられず、アリスの家へ行った。

手紙と一緒にきたことを大笑いされた記憶は新しく、同じような失敗をしたくなかったため、幽香に頼む。

「あー、……そうだったわね」

「幽香も、手伝ってくれるよね？」

「手伝おうかって言ったら、だめ、って言ったのあなたじゃない」

「去年と今年はちがうの……だめ？」

「だめじゃないけど」

「けど？」

「私が手伝って間に合うの？」

「間に合わせるの！」

メデイスンはそう宣言して、去年と同じように、秋の实りを思わせる暖かい色で書きはじめたが、『拝啓』を書いただけで手はすぐにとまり、素直な目を幽香に向ける。

「どうしたの？」

「去年みたいな秋色の便箋が見つからなかったことってどう書けばいいの？」

「素直に、探したけど、見つかりませんでした、って書けばいいじゃない」

「失礼じゃない？」

「そう思うんだったら、失礼だと思われないうちに書けば

いいじゃない」

「簡単に言わないでよ、幽香、お手本」

「お手本？」

「書けるでしょ？」

「そうやって……人に頼るのはよしなさい」

たしなめられたメデイスンはすぐに反対しようとしたが、幽香の瞳に広がるやさしい色を見て、暴れ出ようとしていた言葉はすぐに胸の内へ帰っていき、そういうことを頼む自分自身を当たり前のように恥だと思った。

「あなたが、自分の足で便箋とペンを買って、教本を読んで、アリスのことを思って、言葉を綴る。……心配しなくても、伝わるわ。アリス、すごいんですよ？」

幽香のやさしさの底には、何とも言いがたい彼女独特なものをも寄せつけないような感情が広がっているようで、その感情の正体を知るためにもそばを離れたくなかったが、人間の心に疎いメデイスンが、歌も満足に詠めず、分からないメデイスンでは、幽香に自分の気持ちを伝えられないように思った、だから、アリスのことを話した。

「うん、アリス、すごいんだよ。あの森で一人で暮らしてて、

いろいろ知ってるだよ」

「よく知っているわ、ともだちだから」

「じゃ、ティータムだ！」

「これから？」

「うん！」

「嫌よ、さむいじゃない……」

「じゃ、春になったら、アリスといっしょに来るよ」

「ずいぶんと気が早いのね」

「だって、幽香もそのほうがたのしいでしょ？ アリスも

言ってたんだよ、ひとりよりふたりのほうがたのしいって！」

「……そうね」

「絶対たのしいよ」

次の春のことを考えると、メデイスンはとてもたのしくなったが、心の端にすこし、ほんのすこしだけ痛みを覚えたのは、幽香がひとりぼっちで冬を迎えるからであろうか。

幻想郷は眠る、静かに、厳しい冬が過ぎるのを目をつぶって耐え凌ぐかのように眠る。

幽香は春が来るまでの間、ひろい花畑と家でひとりで過ごす気であるのかと考えれば、メデイスンはとてもおそろしく

思えた。

「急いだからいいんじゃないの？」

幽香にやさしく声をかけられたが、やさしさやぬくもりすらおそろしく、この手紙を書き終えてしまえば、幽香と離れてしまうのが、メディスンにとってはもちろんのこと、幽香にとってもかなしいことであるように思えた、しかし、幽香はそんな感情をひとかけらも見せない、つよい妖怪だった、つよくあるうとするがあまり、ひとりであることに慣れてしまったようだった。

「……幽香は、いいの？」

「何が？」

「私、春まで帰らないよ」

幽香は窓へ目を遣って、黄昏を眺め、

——夕暮れに揺れ落つ思い秋霖に洗い流されひとり待つかな——

という歌を詠んだ。メディスンも幽香のように窓を見たが、空には雨雲一つなく、茜色が丘や山までかなしいほどに伸びており、幽香の歌に流れる雨の静かに理解し、彼女がつよい妖怪であることを理解したメディスンは、ペンを置

き、目をほそめて夕焼けを見る幽香に、一言。

「秋のせいだよ」

「……そうね」

メディスンはそれから幽香に話しかけず、アリスへ送る手紙にペンを走らせる細かな音だけが、しんとした部屋にひろがる。

秋はいじわる、夏と同じようで全然ちがったかたちで力を奪うだとか、一年振りに会うが元気にしているか、とか互いのことを書きながら、家に行けば幽香が寝ていたこと、幽香が一番動くのは秋ということ、春も夏も充電期間のように動かないこと、それでも嫌々ながら話してくれること、そういう幽香が知れたこと、この手紙を書いている時も幽香にさまざまなことを教えてもらったこと、冒頭の秋のことはだから書いたということ、そんなことを書きながら、思いだしたかのように、アリスに似合う空色か秋の実りを思わせる色合いの便箋を買おうとしたのだがみつからなくて、ごめんなさいということも書いた。

月が出てきた頃、メディスンは結びの言葉を書き終え、ペンを置く。

「できた！ 幽香、できたよ！」

「お疲れ様、今日はもう遅いから明日、天狗の所まで行ってきなさい」

メデイスンは翌朝から手紙を読みなおしたり、これまでと同じように幽香とはなの話をしたり、紅茶をたのしんだ、それもこれも幽香とはなれるのを惜しい、メデイスンは幽香に悟られないように、可能なかぎり、ゆつくりと同じ時をいっしょにいた、幽香は何も言わず、それまでとおなじようにメデイスンのそばにいた。

アリスの家に行く前夜、メデイスンはそれまで床にふるいベッドを敷いて寝ていたが、幽香のベッドへもぐりこんだ、ふれた手が一瞬驚いたようにはねたが、幽香はメデイスンに背を向け、せまいことに不満ひとつもささず、ささやくように声をかければ、落ちついた声が返ってくる。

「幽香」

「どうしたの？」

「手紙、書いてよ」

「手紙は書かせるものじゃないわ。アリスに、書いてつて頼まれて書いたわけじゃないでしょ？」

「うん」

「だから、私も、書きたくなったら書くわ」

「ほんと？」

「ええ」

「つてことは、……書きたくなかったの？」

「どういうこと？」

「この前、書いたじゃん」

「忙しかったのよ」

「寝てたじゃん」

「私にも、しないといけないことがあるのよ」

「そうなんだ」

「疑っているでしょ」

「だって……」

「いいわよ、別に」

「いじけなくてもいいじゃん」

「いじけてないわよ」

「いじけてるよ！」

「今日ぐらい、早く寝なさい」

布団から出て、起きあがり、幽香の顔を見ようとした時、

意外なまでに低い声で叱られ、メデイスンはしゅんとなって、するすると布団へ戻った。

話したいことはほかにもあったが、布団の中でそっとふれ、にぎった幽香の手のぬくもりに安心し、メデイスンは次第に落ちつき、眠りへ落ちていく、幽香はメデイスンの手をいっさい拒まず、つつみこむようにやさしくだきしめた。

※

ようやく月が傾き、太陽が昇りはじめた頃、メデイスンは幽香の用意してくれたコート、マフラー、てぶくろをまとい、雪にふられても大丈夫なようにという幽香の置き手紙といっしょに用意されたおおきな傘と長靴を持って、アリスの家を目指す。

「久しぶりー」

「いらっしやい」

おおきなテーブルには去年と変わらないように、人形や魔導書や封が切られた手紙があり、せつせと動く上海人形や

蓬莱人形を見ると、これから片付けるつもりなのだろう、メデイスンは動く人形たちの邪魔にならないように部屋の端にちぢこまっていると、アリスが申しわけそうに声をかけてくれた。

「ごめんなさいね」

「私も手伝おうよ」

「お客さんの手を煩わせるわけにはいかないわ」

宙を舞う人形の数はどんどん増え、目まぐるしく速さでものが片付けられていくと、ベッドがよみがえり、部屋の端に折りたたまれたテーブルやチェアが中央に移され、カーテンがあげられた窓からは澄んだ光が入ってくる。

アリスはふたり分のティーセットに温かい紅茶を用意し、額に浮かんだうすい汗をぬぐう。

「おまたせしちやったわね」

メデイスンは身の丈に合ったチェアを用意してくれるアリスが、砂糖と少しのミルクを入れたあまい紅茶が好みであることを知っているアリスが、微笑を浮かべ、メデイスンの話を聞き、時々声を上げて笑うアリスが、好きだった、一方で、どうしようもないほどの冬、ひとりである幽香のこ

とが気にかかり、アリスとの再会を嬉しく思いながら、嬉しくないと思う自分自身を見つめていた。

「幽香と何かあったのかしら？」

アリスの声にメデイスンは顔を上げた、アリスは微笑を浮かべているが、何かメデイスンを気遣うような不思議な笑みだった、アリスもアリスでメデイスンのことだけではなく、幽香のことを心配しているような気配を覚えた。

「幽香、ひとりなんだって」

「ひとり？」

「うん」

「幽香が言っていたの？」

「言っていないけど、そんな気がする」

「メデイはどうして、そう思うの？」

「わかんない」

「幽香のところに戻る？」

「それはやっちゃいけない」

「どうして？」

「約束したんだ、次はアリスといっしょに行くって」

「……そう、それじゃ、我慢しないといけないわね」

いつあたたかくなるのか、メデイスンもアリスも幽香もしらないだろう、二ヶ月、三ヶ月とかかるかもしれない、その間、メデイスンはアリスとふたりで過ごし、幽香をたつたひとりで過ごさせていいのだろうか、ひとりがどれほどのことなのか、メデイスンはくるしいほどにしている、だからこそ、ひとりにさせたくなかったが、そういう幽香を救えるほどの知能をメデイスンもっていないかった。

もし、メデイスンが人形ではなく、アリスのような魔法使いであれば、幽香のような妖怪であれば、彼女たちのように人間のところを知っていれば、きつと、幽香を助けられるひとつやふたつは浮かんだことだろう。

それからしばらく時が流れ、ふたりで早朝のティータイムを楽しんでいた頃、幽香から手紙がきた。全文を読み終えたアリスは、メデイスンに手紙を受け渡す、アリスに送られたきものを読んでいいのかためらっていると、

「私たち宛てよ」

と言われ、メデイスンはすぐに手紙を読む。

幽香の手紙は簡単な挨拶から始まり、去年と同じように変わらずひとりで花を見ながら、雪に備えながら、秋の疲

れを癒やすようにゆつつくりしている、二人は変わらず元気で過ごしているでしょうか、春を楽しみにしています、という短いものだった。

「やっぱり、幽香は良いのを書くわね」

しかし、メデイスンは幽香の手紙が良いものだとほまつたく思えなかった、彼女の手紙の節々には何十にもつつんだ幽香の感情がにじみ出ていた、つよい妖怪だったところで、ひとりでいることが平気なのではない、アリスはそういうことをわかっているのだろうか、訊いてみたくなかったが、かしく、やさしいアリスがそういうことを正直に答えるとは思えなかった。

「いい？」

「ええ、メデイと違って、要領よくまとめられた手紙だわ」

「私も書こうと思ったら、書けるんだよ？」

「本当？」

「ほんとだよ。幽香に書き方、教わったんだから」

「じゃ、返事、書く？」

「書く、アリスは見ているだけでいいからね」

「それじゃ、失礼じゃない。私も一筆執るわ」

アリスとメデイスンはべつべつの便箋に幽香への返事を書く、メデイスンは幽香に伝えたいことがいっぱいあった、そのすべてをそのまま書いてしまえば幽香に失礼なように思え、どれを書こうか、と考えると、すべて書いてしまいたく、ペンはアリスとちがいがい、動き気配を見せなかった、メデイスンのペンが動くようになったのはアリスが返事を書き終え、紅茶をおかわりしようとしたところだった。

『元気にやっています、幽香も元気？ 手紙の文面だけを追うと、元氣そうに見えるだけにとっても心配。心配っていうか、不安です。いきなり、ひとりになっても幽香は何も言わなくて、まるで、ひとりでいるのが当たり前みたいで、なんだか、私、すごく心細くなったよ。』

幽香が悪いわけではないんだけど……わかるかな？ きつと、アリスに話せば、わかってくれると思うので、この手紙を書き終えたら、アリスといっしょに、幽香についてしっかり話します、やめて、なんて言っても、おそいからね！ 文句はぜんぶ、春に聞くよ。私も言いたいことがあるから。

ほんとなら、ここで歌のひとつでも詠めたら、私も幽香やアリスみたいなおとなになれると思うのだけど、そんなこと

できません。だから、春になったら、そういうことも教えてもらおうからね。次の春は、たのしいこといっぱいにしてよね」

ペンを置き、メデイスンはすぐにアリスの方を見た、アリスのあおい瞳の煌めく知的な輝きに、メデイスンは当たり前のように、彼女ならばメデイスン自身の心に流れる幽香への思いも、幽香のことも答えてくれるだろうと確信した。

「今、幽香はひとりなんだよ」

「そうね」

「幽香、嫌だとか、そういうこと言わなくて、なんだかんだで付き合ってくれて、でも、ひとりになって、私……すぐ失礼かなって思って、幽香のこと、ひとつもわかってなくて……手紙、書いたけど、書けば書くほど、何を書いたらいいかわかってなくて、幽香がひとりだっと思ってたら、手紙なんて書いている場合じゃなくて……でも、でも。歌でも詠めたら、幽香にそのことを伝えられるけど、私、そんなことできないから……」

「メデイは、寂しいのね」

「ぎびしい？」

「ええ、幽香がひとりになって、寂しいと思ってるのよ。寂しいから、かつての自分と同じだから、そういう感情を知っているから、メデイは幽香に対して何とかしたいのよ。……違う？」

「わかんない、でも、幽香がひとりなのは、いや」

「そうね、私もあまりひとりの好きじゃないわ。ねえ、メデイ、春になったら、いっしょに幽香のところに行きましよう」

こどもっぽく笑うアリスに、メデイスンはアリスといっしょに幽香のところに行けば、メデイスンと幽香ふたりだけの時よりも、ずっと楽しいような未来が思い描かれ、メデイスンは大きく笑顔を浮かべ、急いで、返事に書き加えた。

『春になったらアリスと一緒にまた遊びに行きます。アリスには美味しいサンドイッチを作ってもらおうから楽しみに待っててね。幽香は紅茶をよろしくね！』

ある早春の頃であった。メデイスンはまだ日がのぼっていない頃にアリスを起こし、すぐに準備へとりかかった、幸い、サンドイッチは昨夜から仕込んでいたため、そう時間はとられないことだろう。

「アリス、急がないと。幽香、寝ちゃうんだよー」

「メデイ、待つて、ほら、マフラー忘れてるじゃない。あ、てぶくろー！ 耳あてもー」

「そんなに厚着しなくても大丈夫だよ」

「雪降ってるじゃない」

「へーきだつて」

「駄目よ、風邪でも引いたらどうするのよ」

「アリス、おはあちゃんみたい」

「メデイは紅茶だけでいいのね、そう」

「サンドイッチも食べたいよ！ ごめん、ごめんさい、アリス、聞いてよー」

「そう言うなら、準備手伝つてちょうだいね？」

「分かった、何したらいいの？」

「切り分けてあるから、バケットにはさんで」

「うん、任せて」

「紅茶は幽香？」

「うん、任せてって」

「でも、この時間、寝てるんでしょ？」

「朝になったら起きてるんだって」

「え？ どういうこと？」

「幽香が言つてたよ。日がのぼつたら来て、つて」

「……まだまだ時間あるじゃない」

「大丈夫だよ、幽香は起きてるよ。幽香だし」

「信じていいの？」

「うん、大丈夫、幽香だもん」

ふたりはそんなことを話しながら、着々とサンドイッチをバケットに詰める、外に出てみると、アリスの言つた通り、寒く、メデイスンは慌てて部屋に戻り、コートをはおり、マフラー、てぶくろ、耳あてをしっかりつけ、完全防備で出ると、寒くなく、準備を終えたアリスの腕を引っ張り、幽香のいる花畑へ向かう。

「メデイ、そんなに急がなくても大丈夫よ！」

「急いでないよ」

否定したメデイスンだったが、心踊るのを抑えきれず、満面の笑みを浮かべながら、どんとんと歩む、森を抜け、人里の前を通り、雪化粧の山に目もくれず、花畑ついた頃、日はのぼり、麗らかな光を浴びる幽香の姿が見え、メデイスンは手を挙げ、叫んだ。

「幽香！」

幽香もメデイスの声に気づいたらしく、微笑を浮かべる、ふと後ろを見ると、アリスの手はなく、息も絶え絶えな様子で、ゆっくりと向かってくる、メデイスはアリスに見えるように大きく手を振る。

「アリス、おそいよー！」

メデイスは幽香のそばに一輪の赤い花が咲いているのを見て、

——雪ふれば見わたすものなにもなく待ち人のぞむ紅
椿かな——

という歌を思い出し、ようやくあの時の幽香の言葉、幽香の言っていた意味がわかり、清々しい気持ちで幽香の胸へ飛び込んでいった。

東方歌物語 「はなひらく」

出 藍 文 庫

著者 発行者
近藤貴弥

組版 デザイン
RF

原作
ZUN(上海アリス幻楽団)

印刷・製本
Print-on

発行日
2015年9月27日

twitter @s170521
slkk7920521@gmail.com